

マルクス主義理論史研究の課題（Ⅳ）

——松岡・丸山・田中氏の近著によせて——

太 田 仁 樹

目 次

1. はじめに
2. 松岡利道著『ローザ・ルクセンブルク：方法・資本主義・戦争』
(第23巻第1号)
3. 丸山敬一著『マルクス主義と民族問題』
(第23巻第2号)
4. 田中良明著『パルヴスと先進国革命：第2 インタナショナル・マルクス主義の到達点』
(第23巻第4号)
5. マルクス主義現象解明の一環としての理論史研究
(本号)

5. マルクス主義現象の解明の一環としての理論史研究

わが国におけるマルクス主義理論史研究の到達点を示す3著作によって触発された論点について、3回にわたって書き記してきた。本節では、これらの著作の到達点を踏まえて、わが国の従来への諸研究に見られた問題点を概括的に考えてみたい。

① わが国における従来へのマルクス主義理論史研究の問題点

わが国のマルクス主義理論史研究にみられた最も大きな問題点は、マルクス主義の特定の潮流に寄りそった研究態度である。

マルクス主義者は正統的系譜づくりが好きである。近代以前の（そして近

代社会においても) 支配者たちがその血統の由緒正しさを誇示してきたように、マルクス主義者たちは、その思想的系譜の由緒正しさを誇示し、正統の系譜に属さない者たちを異端として弾圧してきた。マルクス主義者のなかで最も多数の者がその正統性を認めてきたのが、マルクス—エンゲルス—レーニン—スターリンという系譜であった。マルクス主義理論の歴史について書かれた著作の多くは、この系譜の正統性を証明することを目的としていた(「スターリン批判」以後には、系譜の最後にスターリンの名を掲げることは少なくなった)。この正統的系譜づくりのなかで、運動史に関連しては、歴史的事実と異なる様々な神話が偽造され、理論史に関連しては、テキストの改竄・隠蔽がおこなわれてきた。レーニンのスターリン批判の文言は削除され、ツァリイズムの拡張主義を批判したマルクスの「18世紀の秘密外交史」は没書にされた。このような流れに沿った「マルクス主義理論史研究」が「学問」の名のもとに通用していたのである。

正統派による「マルクス主義理論史研究」の歪曲をただすのに、大きな功績があったのは、異端といわれてきた潮流を復興させようとする研究であった。わが国においては、カウツキー、ヒルファディング、オットー・パウアー、ベルンシュタイン、ローザ・ルクセンブルク、パルヴス、トロツキー、ブハーリン、グラムシ、コルシュ、ルカーチなどが翻訳・紹介されてきた。この作業によって、マルクスからスターリンにいたるマルクス主義理論の唯一正統の発展系譜という神話は覆され、多様なマルクス主義の潮流の存在が認められるようになった。マルクスのテキストも、スターリン的「史的唯物論」とは一致しない部分に照明が当てられるようになった。1960年代以後、この「脱スターリン主義的」な研究動向が大きな流れとなったのである。だが、この潮流の研究もまた、マルクス—エンゲルス—レーニン—スターリンの正統系譜を真に克服するものとはいえなかった。

第4節においても触れたように、従来の、特に70年代までのわが国の「脱スターリン主義的」なマルクス主義理論史研究においては、左派偏重の傾向

が見られ、ベルンシュタインは、もっぱらネガティブに取り扱われ、ルクセンブルク、トロツキー、ルカーチなどが、ポジティブに取り扱われ、カウツキー、ヒルファディングなどは、レーニンと重なる部分のみがポジティブに扱われるという傾向にあった。正統派的な著作が、スターリンの名こそ明示しないが、1960年代以後も存在し続けたという事情を考えれば、このような潮流も十分意義をもつものであったが、一つの歪みを示すものであった。

「脱スターリン主義的」なマルクス主義理論史研究のなかには、レーニンを基準とすることに満足せず、非主流のフィギュアそのもののなかに、意義を見いだそうとする試みを生むにいたった。本稿で取り上げた3氏の著作もそのような試みに属するものである。しかし、非主流のフィギュアの言説そのもののなから、彼らを研究することの意義を取りだそうという試みは、なかなか困難であった。

松岡氏は、ルクセンブルクのなかに「批判的方法」を見だし、その現代的意義を押しだそうとし、田中氏は、バルヴスによる〔帝国主義＝資本主義の最後の段階〕命題の克服のなかに「第2インタナショナル・マルクス主義の到達点」を見いだそうとしているが、そのいずれも十分に納得し得るものではなかった。丸山氏は、バウアーの民族理論の重要性を提起されたが、その著作全体はレーニンの民族自決権論の正しさを主張するもので、正統派的色彩の強いものに終わっている。

「脱スターリン主義的」なマルクス主義理論史研究の到達点を示すこの3著作の内包するこれらの難点は、正統派に対するアンチテーゼとしての役割を超えて研究を前進させる際の困難さを示しているようだ。

② 「活学活用主義」の弊害

正統派の研究と「脱スターリン主義的」研究とは対立しあうものであったが、共通する研究態度をもっていた。それは研究に値するフィギュアは、その言説のなかに現代からみて直接に学ぶものを含んでいる、逆にいえば、現

代が直接に学ぶものを含んでいるものこそが、マルクス主義理論史研究の対象となりうるという確信である。したがって、マルクス主義史上の諸理論から現代に通用する命題なり発想なりを取り出すことが研究者の任務であるという課題設定がおこなわれる。

正統派の場合、ことは明白である。正統的系譜づくりは、もともと主流派マルクス主義（＝マルクス・レーニン主義）が如何に優れているのか、非主流派マルクス主義や非マルクス主義的社会思想・社会理論が如何に誤謬に満ちたものであるのかを明らかにすることに奉仕するものであった。「脱スターリン主義的」研究においても、ことはそれ程違わなかった。研究者は自分の取り上げたフィギュアの言説のうち、現代に生きている自分が共感できる部分を取り出し、それを現代的意義として前面に押し出そうとした。このような傾向は、マルクス以後のマルクス主義者たちを研究対象とするときだけでなく、マルクスその人を研究対象としたときにも顕著であった。各研究者は「歪められたマルクス」像を批判し、テキストの再構成により「真のマルクス」を発掘しようとしたのである。この場合の「真のマルクス」とは、実はその研究者自身の似姿に他ならないものであった。

後継者が、始祖のテキストのなかから後継者自身の主張に合致する言説を取り出し、始祖の「真の姿」を復活させるというストーリーは、人類史上多くの学問集団や宗教集団に見られることであるが、マルクス主義理論史の研究対象となるマルクス主義者たちもおこなってきたことである。マルクス主義論争史は、マルクスのテキストの「正しい」解釈をめぐる論争の歴史でもあったのである。問題は、論争史を構成するマルクス以後のマルクス主義者たちと、その論争史を研究するマルクス主義理論史研究者が、テキストに対して同じ態度をとっているということである。読み手自身の時代の諸問題の解決の鍵をテキストのなかに探るといふ態度をとることで、マルクス主義理論史研究者は研究主体から研究対象へと移動しているのである。

マルクス自身あるいはそれ以後のマルクス主義者たちの言説を再構成する

ことにより、各時代の社会を分析したりあるいは変革したりするのに、大きな貢献をすることは可能である。そのような貢献をした人々が、マルクス主義理論史の研究対象となっているのである。しかし、そのような営みは、歴史的存在であるマルクス主義はどのようなものであるのかという問いに答えるものではない。マルクス主義理論史研究はこの問いに対する解答の探求の一環であって、マルクス主義理論を用いて、社会を分析したり変革したりすることとは別の営みである。

社会科学というものが、対象とする社会の性格とその生成・発展・衰退の論理を解明するものだとするれば、マルクス主義研究とは、歴史的存在としてのマルクス主義という理論・運動・体制の性格とその生成・発展・衰退の論理を解明することを課題にするものといえよう。マルクス主義理論史研究は、そのようなマルクス主義研究の一翼を担うべきものであろう。それは、マルクス主義理論を構成する諸命題の相互関係を分析し、その理論体系の構造・性格を明らかにすることで、運動史研究や体制研究に対しても一定の方向からの照射をおこない、人類史においてマルクス主義がもった意味を解明する一助となるべきものである。

マルクス主義者たちのテキストのなかから、現代において有効なものを直接見いだそうとする研究は、たとえそれに成功したとしても、マルクス主義とは何なのかを解明するという課題に応えるものとはなりえない。そのような態度は、歴史的な存在としてのマルクス主義が衰退の過程をたどることを検討の課題にしえないからである。私は、マルクス主義理論が現代的な有効性を持たないということを主張しようとしているのではない。理論史研究は対象とする理論が有効性をもつか否かを判定するものではなく、その理論の有効性が多くの人々に認められていたという歴史的な事実を前提としているのであり、その上でその理論の性格を解明するという課題をもつのである。マルクス主義理論史研究は、一定の時代の一定の社会で多数の人々にマルクス主義がその有効性を認められたという歴史的な事実の解明の一環として、

その理論の構造・性格を分析しようとするものである。また、一定の時代、一定の社会ではマルクス主義理論の有効性がほとんど認められないような事態がある場合、その理論の構造・性格という側面から、その事態の意味を明らかにするものである。このような分析は、当然一面的なものであり、社会そのものの性格についての別の諸側面からの分析によって補完されなければならない。しかし、ある時代、ある社会の多数の人々が、ある理論を受け入れた（あるいは、受け入れなかった）場合に、その理論そのものの構造・性格を解明することは、その社会の性格を解明するのに不可欠な作業なのである。マルクス主義の特定の潮流と自己を一体化している研究者は、このような作業をなしえない。

一方、マルクス主義とは別個の理論的立場からマルクス主義の誤謬をあげつらう研究もまたこのような課題を遂行することはできないといえよう。あるべき社会像、あるいはその時代の社会認識において、マルクス主義とは別個の自己の立場の「正しさ」を論証するために、マルクス主義の「誤謬」を指摘する議論は、マルクス主義の成立以後のどの時代にも存在したし、そのような議論とマルクス主義者との論争もまたマルクス主義理論史の研究対象の重要な部分をなしている。だが、このようなマルクス主義研究（＝批判）は、個々の論点において鋭いものを持つことがあっても、マルクス主義が「誤謬」を含みながらも、一定の時代、一定の社会で広く受け入れられたことのもつ意味を問題にしえない。このようなマルクス主義批判の議論は、マルクス主義者たちが課題とした当該社会の認識あるいは変革というレベルで非マルクス主義的な解答を前提としているのであり、その上でマルクス主義と自己の解答とを比較しているわけである。このような批判者たちがマルクス主義に内在することの困難さは明らかであろう。

私は自著のなかで「活学活用主義」的なマルクス主義理論史研究の弊を指摘した⁽¹⁾。正統派的研究はもとより「脱スターリン主義的」な研究にもその弊は色濃く現れていたが、このようなマルクス主義批判の立場に立つマルク

ス主義理論史の研究もまた一種の「活学活用主義」的な作業にすぎないものであるといわねばならない。

③ 諸理論の検討方法について

マルクス主義理論史研究は、マルクス主義運動史研究およびマルクス主義体制研究と如何なる関係にあるのか。マルクス主義は、田中氏の表現を借りれば、「プロレタリア革命の理論／思想」であるから、運動史と理論史は密接に絡まっている。また、マルクス主義体制はマルクス主義運動による政権掌握により成立したものであるから、その体制下に生ずる諸問題がマルクス主義と無縁であるわけではない。しかし、そのことから直ちに運動上の成功をマルクス主義理論の「正しさ」に結びつけたり、逆にマルクス主義体制の崩壊をもってマルクス主義理論の「誤謬」の証明であると考えたりすることはできない。理論は理論固有の領域を持つのであり、その領域での吟味を他の領域の分析によって替えることはできない。

広い意味での理論には、実践に関わる理論と認識に関わる理論とがある。実践に関わる理論には、運動の方針を根拠づける戦略論や戦術論、体制維持のための統治の理論、支配の正統化の理論等があるが、それらの理論自身が認識の理論を多少とも含んでいたり、認識の理論をその基礎としている。それに対して、認識に関わる理論は、実践的立場や実践の問題意識の影響をうけるが、理論史研究上は独立した取り扱いが可能である。さらに、戦略論や戦術論あるいは統治理論や支配正統化理論に含まれる認識に関わる諸命題を再構成することによって、研究対象であるマルクス主義者の認識に関わる理論を抽出し、検討することもできる。理論史研究においては、認識に関わる理論が第1次的なものとなり、実践に関わる理論は第2次的なものとして扱われざるをえない。この場合注意すべきは、認識に関わる理論が正しければ、実践に関わる理論も正しい、前者が間違っていれば、後者も間違いという、単純な照応関係があるのではないといことである。それぞれの領域は相

対的に独立したものであり、認識に関わる理論と実践に関わる理論との組合せが様々でありうることは、理論と運動の現実あるいは体制の現実との組合せが様々であり、それぞれに検討されなければならないと同様である。したがって、認識に関わる理論が第1次的であり、実践に関わる理論が第2次的であるというのも、研究の手続きとしていっているのである。経済論と戦略論のワンセット把握という田中氏のアプローチに対する疑問も、この点に関わるものであった。

マルクス主義理論の変遷の特徴の一つは、始祖のマルクスの決定的な意義である。後のマルクス主義者たちの社会認識の大枠は、ほとんどマルクスによって決定されている。このことは、マルクスその人が人類史上まれにみる幅の広い知的巨人であったことを一因としている。マルクスの社会認識の大枠は「唯物史観」とよばれるものであるが、その理論的中心には『資本論』が位置している。『資本論』は子細に検討すると主要命題間に非整合的なところがあるのだが、その論理的骨格の堅固さは社会科学史上でも抜きんできたものである。唯物史観の諸命題も『資本論』の主要命題と関連させて理解しうるものであり、ここにマルクスの社会理論の際だった体系性と一貫性がある。

後のマルクス主義者たちは誰一人としてマルクスに匹敵するだけの知的な幅と体系的な一貫性を持ちえなかった。カウツキーなどは比較的幅の広い分野での言説を残しているのだが、その言説全体を貫く一貫性が欠けているという印象を与えるのである。後継者たちは、マルクス以後の社会の変化を認識する際に、マルクスが提示した社会認識の大枠を前提とし、その一部に変更あるいは付加をおこなうことで、新しい事態に対処しようとしたのであって、マルクスに匹敵する幅をもった新しい体系をつくり出そうとするものはいなかった。マルクス主義理論の発展といわれるものはこのような一部変更あるいは付加のことであった。このような継承の仕方は、マルクス自身の社会認識に対する根本的な見直しを嫌うという態度を生み出した。「修正派」

にたいする異端糾問的な対応や、社会化論的帝国主義論者たちが、自己の分析が『資本論』の継承であることを強調したことはこのような態度の現れである。

マルクス主義理論史研究は、研究対象であるマルクス主義者たちのこのような態度に照応したアプローチを取らざるをえない。各マルクス主義者の議論の構造を明らかにする際には、マルクスの理論体系との関連をつねに考えなくてはならない。パルヴスの帝国主義認識が資本主義の生命力の承認を内包しているとするなら、そのことと『資本論』との関係は如何なるものなのか。パルヴス自身がその関係を自覚しているの否かを含めて問題にしなければならない。ルクセンブルクが『資本論』に対する批判をも辞さなかったというなら、それでは彼女の社会認識の大枠とは別個のものになるのかどうか、ルクセンブルク自身がその問題に気づいていたのかを含めて検討されるべきであろう。

マルクス主義者たちは、とくに時論的分析あるいは戦略論や戦術論のなかでは、相互に両立しがたい諸命題を併存させていることがある。「活学活用主義」的な研究は、そのなかで研究者自身の共感する命題をとりだして、その「現代的意義」を語るものが多い。あるいは、矛盾する両命題を何とか調停して研究対象の一貫性の破綻を隠そうとする研究もある。このような態度からは、マルクス主義理論の歴史のなかでそのフィギュアのしめる位置の解明もできないし、マルクス主義とは如何なる思考様式であったのかということについての理解の深化もえられない。

テキストのなかに矛盾が存在する場合には、その矛盾の意味を明らかにすることが理論史研究の課題であり、矛盾を解決することが課題ではない。相対立する諸命題が併存しているなら、そのテキスト上および社会的なコンテキストを踏まえて、いずれがメインロジックであり、いずれがサブロジックであるかを確定し、メインロジックと矛盾するサブロジックの存在の意味を解明することは理論史研究の重要課題の一つである。そして、その場合に、

マルクスの理論体系との関連が常に念頭に置かれなければならないのである。理論史研究にとって重要なのは、マルクス主義理論に内在する矛盾や難点を解決することではなく、矛盾や難点の意味を解き明かして、マルクス主義的思考の特質を明らかにすることである。

④ 研究対象の設定と理論史研究のもつ一面性の外観

マルクス主義理論史は、歴史的現象としてのマルクス主義を一定の側面から解明しようとするものであるから、研究対象は、歴史的な影響力の大きかったフィギュアが主要なものとなる。研究の取り組み方は全く違っているが正統派が掲げたエンゲルス、レーニン、スターリンはやはり重要なフィギュアとなる。マルクス—エンゲルス—レーニン—スターリンという正統派系譜の神話に対する反発から、非主流のマルクス主義者たちの研究が一時盛んにおこなわれたが、これによっては正統派神話を本当に覆すことはできない。「相対化」なることがいわれることがあるが、その検討を避けることで主流派の系譜を「相対化」したつもりになっても神話は揺らがない。エンゲルス、レーニン、スターリンのテキストを厳密に検討することで初めて神話の呪縛を解くことができるのである。

カウツキー、ヒルファディング、バウアーといったフィギュアもヒルファディングを別とすれば、なかば埋もれていたフィギュアであるが、ある範囲での主流的理論家であったわけであるから、彼らに対しても十分な検討のメスが振るわれるべきである。トロツキーやブハーリンもこの分類に入れてよいであろう。

主流派のフィギュアばかり取り上げて、少数派のフィギュアの価値を認めないのかという疑問がだされるかもしれない。マルクス主義理論史研究は、埋もれて「異端」扱いされてきたフィギュアを無視するものではない。しかし、非主流のフィギュアを取り上げるのは、その理論を復権させて、現代的意義を語るためではない。非主流のフィギュアが取り上げられるのは、その

理論が独自性を持ち、マルクス主義的思考の特質を考える素材となる場合である。マルクス主義的思考の特質を考える場合の素材として取り扱う点では、主流派の理論家も同じであるが、非主流派の場合には思考の独自性が不可欠である。ローザ・ルクセンブルクやグラムシはこのタイプのフィギュアとして扱われるべきであろう。

意外に重要なのは、非マルクス主義者からマルクス主義者になったり、マルクス主義者から非マルクス主義者となった人々である。わが国では、とくに後者は「転向者」扱いを受け、軽視あるいは蔑視される傾向が強いが、このようなフィギュアの言説は、非マルクス主義時代の言説を含めて全面的に検討し、彼らがマルクス主義的思考のどのような側面に引きつけられ、どのような側面に反発したのかを明らかにすることで、マルクス主義的思考の特質の一端を浮かび上がらせることができる。コルシュなどはこのような観点から検討されるべきであろう。

マルクス主義論争を、マルクス主義的思考の特質を浮かび上がらせるという視点から検討することで、マルクス主義理論と運動および体制との関連を明らかにする糸口がつかめる。しかし、このアプローチは一面的なものである。理論の一定の特質が運動あるいは体制の機能に照応する場合、それは理論の特質の発現のように見えるかもしれない。ソ連における農業政策、民族政策の失敗が、マルクス主義の農業理論、民族理論の「誤謬」の必然的結果のように思われるかもしれない。マルクス主義的思考が結局はマルクスの理論の大枠の内部での部分的変更や付加にすぎないものであったのだから、ソ連における失敗は、マルクスその人の理論の欠陥の必然的帰結であるかのように見える。このような外観は一面的なものであるが、ソ連における農業政策、民族政策の失敗は理論の欠陥と無関係であるわけでもない。それは、マルクス主義運動の世界各国における一定の成功が、その社会認識の一定の妥当性と無縁のものではないのと同様である。理論と政策そしてその政策の帰結との関係は、具体的な歴史過程の総合的分析にまつよりほかない。理論史

研究がおこないうる寄与は、具体的な歴史過程の分析の前提となる、マルクス主義理論の構造、マルクス主義的思考の特質の解明なのである⁽²⁾。

マルクス主義理論史研究は、マルクス主義を発展させたり、排撃したりすることを課題にするものではないという、このような態度は、単なる傍観者的な立場に立つことであり、安易なものであるとの印象を与えるかもしれない。しかし、この態度は相当に困難である。およそ、現代社会で生起するさまざまな事象を分析しようとするなら、反対するにせよ、賛成するにせよ、マルクス主義と無関係に自己の立場を設定することはできない。マルクス主義理論に関心をもつということは、すでにマルクス主義に対する強烈な共感や反感あるいはその両者の混合物を自己のなかに持っているものなのである。わが国では、マルクス主義理論史研究者は、マルクス主義の特定の潮流に対する共感から出発するものがほとんどである。しかし、マルクス主義理論史研究の課題を達成するためには、その出発点での研究者自身の立場から距離をとり、自己をも観察の対象とするもう一人の自己を研究主体として形成することが必要なのである。この点は、マルクス主義に対する反発から出発した研究者においても同様であろう。そのような主体を研究過程で形成することによって、マルクス主義とは何であったのかを問題にでき、マルクス主義を受け入れた社会は如何なるものであったかの解明に資することができるのであり、マルクス主義者にもマルクス主義批判者にも彼ら自身を見つめ直す機会を与えることができるのであり、ひいては社会の分析や変革に対して寄与することができるのである。

本節でいわれたほどのことは、他の理論の歴史の検討についていわれたなら、とりたてていうことのないことであるかもしれない。しかし、マルクス主義理論史研究の現状をみると、このような議論をあえておこなうことも多少は意味があるようにおもわれるのである。

註

- (1) 太田仁樹『レーニンの経済学』（御茶の水書房、1989年）2頁以下参照。
- (2) 相田慎一氏の最近のカウツキー研究は、カウツキーの理論と運動史上でその理論の
もった意味との関連を探るきわめて興味深いものである。ただ、カウツキー理論そのもの
の特質の一層の鮮明化をすすめたうえで、SPD 内部での統合化機能という役割との
内的連関づけを希望したい。相田氏の最近の研究には以下のものがある。
- [1985] ドイツ第二帝制とカール・カウツキーの政策思想：『通商政策と社会民主党』
（1901）を中心に、住谷一彦・田村信一・小林純編『ドイツ国民経済の史的研
究』（御茶の水書房）所収
- [1987] カウツキーのドイツ第二帝制観：「帝国の状態」（1907）を中心に、『専修大学北
海道短期大学紀要』20
- [1989] ドイツ社会民主党と「生産の社会化」論：1900年マインツ党大会における国内通
商政策＝「鉄道の帝国委譲」問題をめぐる論争との関連を中心にして、『専修大
学北海道短期大学紀要』22
- [1991] カウツキーの民族理論：『民族性と国際性』（1908）を中心に、『立教経済学研
究』44-3

P S . 本稿は、1991年2月にその全体が執筆された。分載するにあたって、
字句の修正をおこなったが、基本的な論旨の変更はない。この間、ソ連
におけるクーデターの失敗とそれに続くソ連共産党およびソ連の解体が
あった。分載第2回において予測された「ソ連そのものの崩壊」が現実
のものとなったわけである。この出来事は、マルクス主義の歴史のなか
で最も大きな意味をもつものの一つであろう。本稿で示されたマルクス
主義理論史研究の意義は一層大きなものになるであろう。

（1992年3月3日記）